

文部省特選 教育映画祭最優秀作品賞

生活とは何か

ほんとうの豊かさとは何かを

問い直した母親たちの歩みを描く！



社会教育映画

ふるさとに生きる母たち

¥ 165,000

■ 製作意図

高度経済成長の波に押し流されてきた生活を、質素ではあるが安定したくらしに変えようとしても、それはお互いに容易なことではない。この映画は、冬は年寄と子供を残して全村出稼ぎにでかけていた秋田県の山村の母たちが子供と暮す決意をし、共同で肉牛を飼う母親牧場設立というきびしい道を歩みだした記録である。

出稼ぎは手っ取り早い金銭獲得方法ではあったが、子供たちにも地域社会にも荒廃をもたらした。うわべはよくなってもそれでは元も子もない。

再び大地とのかかわりを求め地域社会の再建にのりだした人々の歩みは、単に山村の問題としてばかりではなく、現在の日本の社会に生きる人々の生活に深く根ざした問題にひとつの方向を与えている。

■ 対象 青年、成人（婦人）

■ 用途 市民教育（市民意識・社会連帯意識）
家庭教育（家庭における人間関係）

■ 利用方法

小集団学習の場合—青年学級、婦人学級、母親学級などの学習計画「出稼ぎと家庭生活」「出稼ぎと地域社会の再開発」「『ふるさとに生きる母たち』から何を引き出すか」「家庭における母の力」などの教材として好適。

集会学習の場合—青年団体、地域婦人会、母の会、PTA等の集会の際に上映して、「母たちの可能性とその期待」「力強く生きる母とその子たち」などについて学習するに良き教材。

不特定多数対象の映画会—青年の家や公民館、婦人会館、「よい映画をみる会」などに広く公開して、社会教育一般向けに利用して、力強く生きる母の姿を理解したい。



企画 貯蓄増強中央委員会
製作 株式会社 桜映画社



すいせんのことば

映画評論家 大内秀邦

戸数僅か51戸、その半数以上の夫婦が出稼ぎをしていた、秋田県山峡いの釜ヶ台に、母親牧場ができてあかるい希望が持てるようになった。その間の経過を一年有余にわたって展開する、量感に満ち溢れた作品である。

というのは、それを単なるあまの夢物語としてではなく、馬の飼育や炭焼きなどの過去の生活を織りまぜて対照的に構成する一方、自然や現実のきびしさをなまなましく描いているからである。しかも吹雪をついて登校したり学校で入浴を楽しんだりしていることもたちの表情に、たのもし未来が期待されるなど、だれにも興味深く見られる。農村の実態を知るとともに、さまざまな話題を引き出すことができる、利用範囲の広いすぐれた作品である。

製作スタッフ

製	作・村	山	英	治
		村	山	和雄
脚本・演出	・金	子	精	吾
撮	影・江	連	高	元
音	楽・広	瀬	量	平
照	明・本	橋	俊	男
編	集・沼	崎	梅	子
解	説・久	米		明

あらすじ

秋田県仁賀保町釜ヶ台地区は、峠をこえた山峡の山村である。稲作の他に木炭や薬工品をつくって暮してきた。豊かな草原を生かして馬の飼育にも力を入れていた。

昭和40年頃から耕運機や石油ストーブが普及しはじめ馬も木炭も売れなくなり、ビニールや紙袋が薬工品にとってかわった。収入が減って支出がふえた。家の働き手は出稼ぎに出かけて家計を補わなければならなくなった。はじめに父親が、やがて母親も出かけていった。

家に待つ子供たちは決して淋しさを口にしないが、突然大声をあげて乱暴したりするようになった。

都会で働く父母たちの仕事はきびしい。学校で送ってくれるふるさとの便りはうれしかった。

金銭を得るだけが生活の豊かさではないはずだ。母親だけでもふるさにと残りたい。期せずしてみんなの気持ちが一つになった。母たちの熱心な訴えの結果、県の山村主婦を対象にした畜産振興策の適用を受け、20人の母親を組合員として、昭和48年12月ついに日本初の母親牧場が誕生した。

母親たちは規模の大きい共同経営の責任の重さをずっしりと感じた。牧草の研究、経営の勉強と、くりかえされる集団学習の中で、出稼ぎの間に失われた母たちの連帯感がよみがえってきた。

子牛の出荷の時がきた。市場では手塩にかけた牛が予想以上の安値だった。

母たちの暗い気持ちを吹き飛ばすように中学生たちが牧場を手伝ってくれる。新しい生命の誕生もあった。母達は又勇気を取りもどす。

牧場は一周年を迎えた。子供たちは明かるくなった。母親たちも出稼ぎの時よりはるかに生活にはりをもった毎日をむかえている。

話し合いの要点

1. 父に続いて母が出稼ぎに出なければならぬ事情を分析してみる。それはどうにもならないことだろうか。
2. 両親の出稼ぎによって、子どもたちは、心理的にどんな代価を受けただろうか。
3. 出稼ぎの両親と淋しくがまんしている子どもたちの中に立って、学校はどんな役割をはたしただろうか。
4. 出稼ぎに出ている両親たち、家を憶い子どもを心配している気持ちがくみとれる。その点が映像としてどう表現されているか。
5. 母親牧場建設の動機は何か。
6. 母親牧場を成功に導くものは何だろうか。そのうちの一人があなただったらどうしたろう？
7. 母親たちがふるさにと残るようになって、子どもたちの表情はどう変ったか。
8. 母たちの労働を手伝いながら、労働と生産の大事なことを、身をもって体験していく中学生。この子たちの人間形成への影響はどうか。
9. 畜産は厳しい。しかし私たちの中には、育つものがあるという。これこそ母たちの生きがい。それは何と何か。
10. 牧場設立1周年祝餅の意味するもの？
11. この映画から何を引き出すか。この母たちのすばらしい力(可能性)を、今の自分たちの状況ではどう生かしたらよいか。



株式会社

桜映画社

東京都渋谷区代々木1-57-1 代々木センタービル
〒151 TEL 03(3320)6311 FAX 03(3320)7666

取扱店